



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	乳児はきょうだいをどのようにとらえていくのか：ふたり兄弟の縦断的行動観察をもとに(fulltext)
Author(s)	高橋,道子; 工藤,めぐみ
Citation	東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 62(1): 273-285
Issue Date	2011-02-00
URL	http://hdl.handle.net/2309/108097
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

乳児はきょうだいをどのようにとらえていくのか

—— ふたり兄弟の縦断的行動観察をもとに ——

高橋道子*・工藤めぐみ**

教育心理学

(2010年9月27日受理)

1. 問題と目的

1. 1 乳幼児期の対人関係

おおよその乳児は、生まれてすぐ、家族集団に所属し、そこで初めに親子関係を経験する(依田, 1968)。そして、家族構成によってはきょうだい関係を形成したり、祖父母や親戚の大人、子どもとの関係を形成する。さらに、家族外の集団との交流を持つようになると、仲間関係を形成する。このように、成長に伴って人間関係は広がっていくが、人との関わりが発達に及ぼす影響も大きいと思われる。

依田(1996)は、幼い子どもが社会的相互作用を持つ対象を、親、友だち、きょうだいの3つのグループに分け、それぞれとの関係をタテ・ヨコ・ナナメの関係と表している。タテの関係とは、保護する者と保護される者の関係、しつけをする者としつけられる者の関係など、同じ次元に立っていない関係である。ヨコの関係では養育やしつけはなく、友だち同士は同じ次元に立っている。そして、ナナメの関係は、上の子どもが下の子どもを指導したり、下の子どもが上の子どもに従ったり、依存したりするタテの関係と、きょうだいげんかをしたり、仲良く遊んでいたりするヨコの関係の両側面が含まれていると言われる。

小嶋(1989)は、依田(1996)が挙げたこれらの対象とのやり取りは、それぞれ子どもにとって異なった機能を持っているとしている。まず、タテの関係である親は「子どもに接するとき、相手の能力の水準近くに『降りてきて』働きかける」というように、子どもの行動や状態に応じて、自らの行動を調節することが

できる。次に、ヨコの関係である同じ年齢の同じような能力・技能を備えた「友だち」同士の相互作用には手加減がなく、真剣勝負となる。そして、ナナメの関係であるきょうだいとの関係は、親との間ほどに落差はないが、能力・技能面での差がある。それを知っている年上の子は、年下の子に対して働きかける行動を調整したりすることもある。一方で、きょうだい関係には「子ども同士」という受け止めに基づく行動もよく見られる。激しいけんかや嫉妬の感情が起こるのは、タテの関係のみならず、ヨコの関係という側面も持ち合わせているからだと考えられる。

1. 2 乳児のタテの関係・ヨコの関係

乳児の行動研究については、対母親、対乳児の行動を調べたものが多い。相手が親の場合には、既述したように、親が子どもの発達段階に「降りてきて」(小嶋, 1989)接するため、乳児から何かしらの問いかけをすれば、親が子どもに合わせて行動を調整してくれる。

一方、乳児が、ヨコの関係である乳児に対して社会的行動をした場合には、相手も同じくらいの発達段階であるため、必ずしも反応が返ってくるとは限らないし、乳児が求めたものと違った反応が返ってくることも多くある。その中でも、乳児同士の関わりには、モノの存在が大きな役割を果たしている(高橋・佐藤, 1985)。江口(1978)によれば、保育園の1歳児同士の相互交渉において、モノの存在が無視できず、モノの譲渡や争奪行動の比率が高くなっている。子ども同士の間にモノの争奪に関するやり取りが生じやすい理

* 東京学芸大学(184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

** 熊谷児童相談所

由として、他の子どもが持っていたり遊んでいる玩具のほうが、床の上に置いてある玩具よりも魅力的に見えることが挙げられる。他の友だちが持っているということで、その玩具が特別な意味を持つてくるのだろう。そういう意味からすれば、子どもの行動は、他の子どもの行動の影響を強く受けていると言える。

1. 3 乳児のナナメの関係

Bowlby (1969)によれば、乳児は生後12週を過ぎた頃から、日常よく関わってくれる人、多くの場合母親に対して愛着行動を向けるようになり、6ヶ月頃から2、3歳の間に、人物の識別がさらに明確になり、相手によって反応を変えたりするようになる。家族などの見慣れた人は、二次的の愛着対象になるが、きょうだいもここに含まれると考えられる。

依田 (1968)によれば、きょうだい関係は、友だち関係を作るための橋渡しの役割を果たしていると言う。きょうだいがいる子どもは、毎日、大人(親)とも子ども(きょうだい)とも付き合うことを通して、大人と子どもは違うということを学習し、大人との付き合い方と子どもとの付き合い方とは変えないとうまくいかないということを理解するようになる。つまり、きょうだいの存在は、子どもとの付き合い方を教えてくれるものなのである。

また、菊地 (2006)は上の子と下の子の違いを次のように述べている。まず、上の子は誰もが初めは一人っ子であり、同居する家族は大人ばかりであることが多く、人との関わりは対大人が中心となる。一方、下の子にとっての家族とは、大人に加え、自分に近い年齢の子どもが存在する。下の子は、生まれながらに競争社会で親を独占することはできず、全てにおいて自分より上手である上の子と対決しなければならない。しかし、そのような生活環境の中で、下の子は「自分が家庭内で最も幼いことを有効利用し、自己主張、自己表現の手段を身につけ、兄や姉との共存のために要領よい生活態度を覚えていく」と言う。さらに菊地は、下の子は親から手をかけてもらう機会が上の子に比べて少ないが、上の子をモデリングすることで、自分で何かを習得する力を備えやすく、社会性も身につけやすいと述べている。

このように、きょうだいの存在により、下の子と親との関わりは減ることも考えられるが、むしろきょうだいの存在によって社会で生きていくための力をつけていくことができると考えられる。

1. 4 下の子は、きょうだいをどのように見ているのか

きょうだい関係の研究は、幼児以上を対象にしたものが多い。依田 (1965)や早川・依田 (1983)は児童生徒を対象に、伊藤・五十嵐 (1977)は幼児を対象に、それぞれTATを用いて、子どもたち自身がきょうだいとの関係をどのように認知しているのかについて調査を行っている。

また、岩田 (2000)など上の子に焦点を当てた研究や調査はなされているが、下の子に焦点を当てた研究は少ない。しかし、下の子から見て、きょうだいとはどのような存在なのかということを問いかけて行われた小嶋・山田・村上・河合 (1982)の研究により、母ときょうだいの関係を乳児がどのように認知しているのかが明らかにされた。

小嶋らの研究では、5つの条件が設定された。つまり、子どもが1人遊びをしている状況下で母親が抱いているものにより①箱条件、②人形条件、③きょうだい条件を、母親ときょうだいが遊んでいるものにより④電話条件、⑤ボール条件を設定した。そして、3つに分けた年齢群(Y群:平均11ヶ月、M群:平均19ヶ月、O群:平均23ヶ月)によって、場面によりどのような行動の違いが見られたかなどが分析された。そのうち、③きょうだい条件では、母ときょうだいを引っ張って泣いたり、すねて別のものに当たるなど、ネガティブな強い情動反応が見られた。その一方で、玩具を持って近づき、それを母ときょうだいのそばに置いて帰るなど「接近するが、直接的には働きかけない」行動や、遊びを通して働きかける「間接的な行動」が多く見られた。そのため、この行動は、母ときょうだいの間に結ばれている関係にストレートに入り込んでいけずに、やや遠慮した形で、「母-きょうだい」の中に入ろうとしたり、自分のほうへ注意を引こうと働きかけたりしたものと考えられた。そして、母ときょうだいの間に何らかの閉じた環が形成されていると認知された場合、外側から直接には割り込みにくいという社会的認知とそれに応じた反応様式が既にこの年齢の子どもにも出現していることを示すものとされた。また、②人形条件のときは手ぶらで接近するのに、③きょうだい条件では手元の玩具を持参しており、子どもなりに母-きょうだい関係を認めて、その関係の中に私も入れて仲間入りするために、乳児の行動のレパートリーから、さまざまな行動を繰り返しているのではないかと考察されている。

1. 5 目的

これまで述べてきたように、きょうだい関係の研究は、幼児期以降のものが中心で、乳児の行動についても、対大人、対乳児についての研究が中心となっており、乳児期のきょうだい関係、特に、下の子である乳児に焦点を当てた研究は少ない。

きょうだいといっても、性別、出生順位、人数、年齢差などの要因により、その在り方は様々である。しかし、きょうだいがいることは、子どもにとっては大きな影響があり、きょうだいへの関わり方だけでなく、仲間入りの方法を乳児が早期から考え、身につけていく機会となる。そこで、本研究では、以下の3点を明らかにすることを目的とする。

- 1) 乳児は、きょうだいをどのようにとらえていくのか。
- 2) きょうだいがいることにより、どのような社会性が乳幼児期から身につくと考えられるのか。
- 3) きょうだいの、タテ・ヨコ・ナナメの関係は、どのように形成されていくのか。

2. 方法

本研究の焦点は乳児（きょうだいの下の子）であるため、観察された乳児の行動とその変化をもとに、乳児がきょうだい（上の子）をどのようにとらえているのかを考察する。そして、それらをもとに、社会性やタテ・ヨコ・ナナメの関係についても考察する。

2. 1 対象児

対象児は、埼玉県在住の2歳3ヶ月差の男児きょうだいである。弟は、2008年7月7日生まれ、兄は2006年4月6日生まれであり、対象児の家族は、父、母、男児兄弟の4人家族である。本論文において、対象児の呼称は、「弟」、「兄」とする。なお対象児は、観察者である第2執筆者の親戚であるため、観察時以外にも交流することがあった。

2. 2 観察期間

観察期間は、2009年1月～11月、2010年2月であり、概ね1週間から10日に1回の頻度で観察し、全部で35回観察した。観察期間中の対象児の月齢は、弟が6ヶ月～19ヶ月（1歳7ヶ月）、兄が2歳9ヶ月～3歳10ヶ月であった。

2. 3 観察手続き

日常生活でのきょうだいの関わりを観察するた

め、対象児の自宅で観察を行った。本観察に先立ち、2008年12月に3回、対象児と母親がビデオ撮影に慣れることを目的にビデオカメラを持って家庭訪問した。観察日には、訪問直後10分ほど遊んだりした後約30分間、対象児と母親の生活の様子を観察者1名でビデオ撮影した。訪問時、基本的には父親は不在であったが、父親が家に居ることも数回あった。

対象児や母親には自由に行動してもらっていたので、対象児の居場所に依りて、観察者も撮影場所を変えた。観察者は基本的には傍観したが、対象児からの要求があったときには対応した。撮影は、弟が昼寝に入ったり、泣きが続いたり、おしめを変えたりするときには中断した。

なお、2010年2月の観察は観察者の自宅で行い、その場に母親はおらず、対象児の祖母が居た。

2. 4 分析手続き

本研究では、行動観察のデータを整理し、行動の出現・変化を明らかにするを通して、その行動を解釈していくことが中心である。ここでは、行動の出現・変化を明らかにするための手順を示す。

(1) エピソードの抽出

まず、録画したビデオから、弟・兄・母・観察者の行動の様子をそれぞれ書き起こした。誰が誰に働きかけたか、誰の行動によって誰の次の行動が起こったかなどの前後関係が分かるように記録した。会話については、喃語が多かったり、聞き取りづらかったりしたため、詳細には記録せず、どのような会話をしていたのか、どのような言葉をかけたのかなどを、行動の一部として簡略化して記述した。

また、本研究では「乳児（弟）のきょうだい（兄）に対する行動」をもとに結果を導き出すため、分析を進めるにあたって、兄の行動の変わり目をエピソードの区切り目とした。

1つのエピソードには、兄がやっていることや触っているものなどは1つになっている。例えば、兄がバスのミニカーを動かして遊んでおり、その次に、パトカーのミニカーを動かし始めたとする。この場合、兄がバスのミニカーで遊んだということで1つのエピソード、パトカーのミニカーで遊んだということで1つのエピソードとなる。このように、兄の1つの行動の継続時間によって、時間的に短いエピソード、長いエピソードができた。また、兄が1人で絵本を見ていて、途中から母の膝に座ってその絵本を読んでもらい始めた場合には、兄が1人で絵本を見ていることと、母の膝に座って絵本を読んでもらっ

ていることは、別々のエピソードとなる。これは、兄が絵本を読んでいるその状況に違いがあるからである。

なお、エピソードの区切りの基準は兄の行動であっても、分析で重要な焦点は、その場面での弟の行動である。

(2) エピソードの分類・整理

弟が19ヶ月時(2010年2月)の観察を除いて、観察時には必ず弟・兄・母の3人が同じ家の中という同一空間にいた。その中で、3人はそれぞれ自由に行動でき、接近する、話しかけるなどの方法で他の2人に対していつでも「関わり」を持つことができた。

本研究では、「関わり」という言葉を、客観的に見て、接触・交流していることとした。さらに「接触」とは、「抱きつく」「母の膝に座る」等の身体的な接触をさすものとし、「交流」とは「顔を向かい合わせての会話」「歌を歌う」「玩具を介して遊ぶ」等のコミュニケーションをさすものとした。したがって、兄が母のすぐそばに座っていたとしても、交流がなければ「関わっていない」と見なした。弟が交流、接触を認識しているか否かは考慮せず、客観的に判断した。

母親は、弟・兄のどちらにとっても、愛着の対象であり、安全基地となる対象である。小嶋ら(1982)の研究では、母が兄を抱いている場面(きょうだい条件)において、下の子が泣き叫ぶように兄と母に接近していったことがあることから、兄と母が関わっていることは、弟にとっては脅威になりうると考えられる。それゆえ、兄が母と関わっているか否かによって弟の行動には違いが生じると推測される。

そこで本研究では、①兄と母が関わっていない場面と、②兄と母が関わっている場面にエピソードを分類した。その結果、①は242エピソード、②は173エピソードとなった。なお、19ヶ月時では、17エピソードを得られたが、観察場面には母はいなかったため①②の分類には加えずに分析し、合計432エピソードを分析対象とした。表1に弟の各月齢時における観察回数とエピソード数を示す。

次に、各場面において弟がどのような行動をしたのかの変化・出現を把握した。具体的には、まず、弟の行動が類似しているエピソードを同じグループにした。次に、そのグループを1つのまとまりとして、そ

のグループ内でエピソードを月齢順に並べて、類似した行動内の質的变化を追い、弟の行動が起こった理由を考察していった。

3. 結果と考察

弟が兄をどのようにとらえていくのかに関しては、エピソードに基づき、質的に大きな変化が4段階として示された。以下では、その月齢時期を目安として、エピソード例を引用しながら弟の行動の読み取り・解釈を行い、考察していく。例示したエピソードには本文中での引用順に一連のエピソード番号を「EP-1」のように示し、その時の弟の月齢をエピソードの文末に示した。なお、例示したエピソードでは、その前後の様子も把握できるように記述したために、分析方法で述べた1エピソードの区切りを越えて包括的に示している場合もある。

3. 1 8ヶ月頃：兄は母とは違う、自分の望みをかなえてくれない人

表2に示すEP-1のように、弟が兄と母の間に入って、モノを取ったりする行動が見られた。モノを得られないとき弟が泣くことから、「これが欲しい」という意志によってなされていると考えられ、手に入れられなかったとき、弟の欲求が満たされないため泣くと言える。よって、手を伸ばす行動は、モノを手に入れ、弟自身が持つことを目的とした行動であると考えられる。

そして、その弟の行動に対して、兄と母が示す行動は異なっていた。EP-2のように、兄は、弟が欲しいと思って手を伸ばしたものを遠ざけるなど、弟の要望に応える行動はほとんどなく、別のエピソードでは、弟が先に持って遊んでいるモノを、兄が強引に取ってしまうということもあった。一方、母は、弟の行動に合わせて、玩具を差し出したり、近づけたりすることができ、弟が手を伸ばせば、見せたり、持たせてあげたりする。

弟が兄と母に接近する動機としては、兄と母が遊んでいるモノに関心をもったということが考えられる。特に弟は、兄と母に接近すると、兄と母が遊んでいるそのモノに手を出すことが多く見られた。対象児の家

表1 弟の各月齢時における観察回数とエピソード数

月齢(ヶ月)	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	19	計
観察回数	5	4	3	3	5	2	2	4	1	2	1	3	35
エピソード数	74	33	36	54	67	30	35	56	10	15	5	17	432

には様々な玩具があるが、玩具の中でも兄と母が持っているモノは、兄と母が持っているが故に弟にとって魅力的なモノとなると考えられる。

8ヶ月頃は、モノをきっかけに弟が行動を繰り返すことによって、兄と母はどんな人か、自分にどんなことをしてくれるのかを学んでいくと考えられる。また、観察当初から、弟が遊んでいるモノ、持っているモノを兄が奪うという行動が頻繁に見られた。これらの経験を積むうちに、弟は、兄と母とは違う存在であると区別し、「兄は自分の欲しいモノをくれない人」と認識していると考えられる。

3. 2 10ヶ月頃：兄は面白いけど、自分より上の存在。関わる時は警戒している

兄に対する弟の消極的な行動も見られたが、移動がスムーズになったことによる行動の変化も見られた。

表3に示すEP-3は、兄に接近しても兄が見ている絵本にすぐに手を出さず、兄から絵本を取ることはしないというものである。弟は、ハイハイでスムーズな移動ができるようになり、関心のあるモノに自由に近づいたり、兄に接近したりすることができるようになったが、兄が使っているモノに「手を伸ばす」という行動には、ためらいがあるように見える。一方で、EP-3の終盤で母に絵本を出されたときに、弟はすぐに絵本を取りに行っていた。このことから、10ヶ月の時点では、相手が母であるか、兄であるかによって、行動に違いがあると言える。そして、兄のモノに手を伸ばすことに躊躇しているように見えることから、兄のモノに手を伸ばすことに対して何らかの身構え、警戒心があると推測される。モノに接近したり、手を伸ばしたりするのは「これが欲しい」という意志表示であると考えられるが、相手によりその行動を調整していると考えられる。

行動を調節している例として、EP-4のように「兄が手放した後に取る」行動、EP-5のように、「兄が遊んでいる最中には見ているだけで、兄がその場から離れると兄がいた場所へ移動して触る」行動が見られた。これは8ヶ月頃の「兄が遊んでいるモノを取ろうとし

ても、兄は遠ざけたりしてモノをくれない」という経験から、「兄が遊んでいる最中にとってはいけない」ということを学習した結果であると推測できる。さらに、EP-5の続きでは、兄が戻ってくると、弟は枕を手放した。他にも「兄がその場を離れると、弟は兄がやっていた行動を真似しようとし始めるが、兄が戻ってくると、その行動自体をやめる」というエピソードがあった。兄が帰ってくると、弟はそれまでの兄の行動の真似をやめることから、10ヶ月の時点で弟には「これは兄のモノ」「兄が来たら譲らないと、また泣かされるかもしれない、だから兄が戻ってきたら譲らなくてはいけない」という認識があると考えられる。兄に対する関心とともに、警戒心を持っていると思われる。

弟は、兄が遊んでいる最中は、兄が玩具を操作しているのを見て遊び方を学習し、兄が手放してから遊ぶことで、そのモノの楽しさや魅力を知っていったと考えられる。また、そのモノの魅力だけでなく、それで遊んでいた兄に対しても、興味がわいていく時期であると考えられる。

一方、EP-6のように、兄のモノを手に入れるために簡単には諦めず、果敢に兄に向かっていく行動も見られた。EP-6ではモノがずっと手の届く範囲にあったため、諦めずに向かっていったと考えることもできるが、自分で兄の手を取って兄の手をどかさそうとするなど、兄に対抗していくようになったのは大きな変化と言える。

この時期になると乳児は、ピアジェのいうように「モノは知覚されなくても存在し続ける」という対象の永続性を成立させるようになる。EP-6のように、兄に対して果敢に向かっていくような行動が見られ始めたのは、対象の永続性の概念が成立したと考えることもできるのではないだろうか。この時期の乳児は、玩具を布で隠された場合、玩具を手に入れるために、布という障害物を取り除くことができる。これをEP-6の場合で考えてみると、障害物に当たるものは「兄の手」ということになる。一方、1ヵ月早いEP-7では、カードを上へ上げられてしまったことで、弟はカード

表2 弟が8ヶ月頃のエピソード

EP-1	弟は1人で本を見ている。兄と母が絵本を読み始めると、弟はすぐに兄と母が読んでいる絵本に手を伸ばすが、絵本は持てず、泣き出し、母に抱きつく。(7ヶ月)
EP-2	兄が音の流れる玩具で遊び始めると、母に抱っこされていた弟は降りたがるそぶりを見せる。そして母から離れ、ハイハイで兄の隣に座る。手を伸ばして玩具に触るが、兄が玩具を遠ざける。弟は声を出して母のほうを見て、再び兄に近づく。その後、母が別の玩具を弟の前に出し、その玩具を弟が持つが、兄に取られる。(8ヶ月)

を知覚できなくなり、なくなってしまったと思ったと考えることができる。モノをめぐって争うようになるのは、「これが欲しい」という意志のぶつかり合いによるものであると思われるが、「対象の永続性」の概念の成立も関係していると考えられる。

以上のように、10ヶ月頃は、8ヶ月頃の「兄のモノに手を伸ばしても、兄に取り返される、兄に邪魔される、自分が持っているモノを兄に取られる」という経験から、「兄のモノは取ってはいけない」と認識し始め、「これが欲しい」という気持ちを兄の前では抑制し、「兄が遊んでいる最中は見ている」「兄が手放したら取る」「兄が戻ってきたら譲る」というような消極的な行動をし始めると考えられる。一方で、母の前では、自分の気持ちを表出しており、弟は兄と母との違いを区別して行動も変えている。また、兄が手放したモノを手に入れることにより、そのモノの魅力を発見し、そのモノを元々持っていた兄への関心も高まり、兄が持っているモノに、より関心をもつようになり、兄そのもの、つまり兄の行動自体にも関心を広げていると考えられる。このように、兄に対して警戒心とともに関心を持ち始め、兄を自分よりも上の存在と認識していると考えられる。

3. 3 1歳頃：兄は非常に気になる存在、憧れであり、兄と同じでありたい

表4のEP-8に示すように、弟は兄に近づいても、

絵本には手を伸ばさず、「兄が持つ絵本をそばで見る」ということだけで満足するようになったと考えることができる。また、EP-9においても、兄が遊んでいる最中に接近し、兄が触っていないモノで遊んでいる。兄に自由に遊ばせてもらえない状況では、弟は自ら移動することで兄の影響が及ばない場を確保し、自分のやりたい遊びをしている。10ヶ月頃に引き続き、兄に対して消極的な行動をし、やや遠慮しているように見えるが、兄のそばで上手に遊ぶ方法を身につけてきていると言える。弟は自分がかんだ玩具の面白さを知っているため、もしくは、その時に面白さを発見したため、兄が遊んでいる玩具そのものでなくても、弟の気持ちが満たされていると推測される。

また、EP-10のように、母に対する兄の行動を直後に真似る行動も見られた。別のエピソードでは、兄が絵本を手放した後に、兄と母が読んでいた絵本に向かい、指さしをして母に関わりを求める行動も見られた。兄のように母に働きかけることで、自分も同じように注目してもらえと思ったと推測される。弟は兄を見て、母との関わり方を学んでいると言える。

兄の行動を真似る動機として、次のことが考えられる。第1に、兄が楽しそうにやっけていて、兄が関わる相手、つまり母が兄の行動を受け入れていることを弟は見ているため、「自分もやって楽しみたい、関わりたい」という思いを持つようになることである。第2に、兄の真似をすること自体、「兄と同じモノを使って、兄

表3 弟が10ヶ月頃のエピソード

EP-3	兄は母親との手遊びをやめて、絵本を下において、一人で見始め、絵本の中に出てくるせりふを繰り返し言う。弟は兄の前に行き、お座りをし、絵本を見る。そして、母を見ると、母に向かってハイハイで近づく。母のそばで兄が見ている絵本を見る。母が、「上手だね」と言って兄の頭をなでると、弟はハイハイで兄に近づく。そして絵本に手を伸ばし、お座りをする。声を出して手を上にあげる。近くにあった玩具を持ち、上に上げたり、なめたりする。その後、兄の絵本に手を伸ばすと、兄は弟から絵本を遠ざける。弟は兄をしばらく見つめる。母が弟の前に、別の絵本を置くと、弟はその絵本を持ってページをめくったりする。(10ヶ月)
EP-4	兄は読んでいた雑誌を脇において、違う絵本を見始める。兄は指さしをして、母に名前を言ってもらっている。弟はハイハイで兄の脇に行き、兄が手放した雑誌を取り、裏返したり、見たりする。(9ヶ月)
EP-5	兄は、枕を上から落として遊んでいた。弟はそれを見ていた。兄が枕を置いて、ジャンプをし始める。すると、弟は兄がいた場所に移動して、枕に触る。そして、兄が戻ってくると、弟は枕から手を放し、自分が元々いた場所に戻る。(11ヶ月)
EP-6	兄が机で音の出る玩具で遊んでいる。弟は兄に接近して机につかまり立ちをして、その玩具に向かって左手を伸ばす。すると兄は弟の左腕の上に自分の右腕をのせる。弟は左手を兄の右腕の下から抜いて兄の手の上に置く。兄は、手で弟の体ごと遠ざけようとする。弟は泣き出す。(10ヶ月)
EP-7	兄が丸椅子を持ってきて、カードを持って座る。弟はハイハイで兄に近づき、イスにつかまり立ちをして、兄が持っているカードに手を伸ばす。しかし、兄はカードを上であげてしまい、弟は取るができない。すると、弟はその場にしゃがみ、ハイハイの姿勢になって兄を離れて、絵本を見始める。(9ヶ月)

と同じように母に働きかける」ということ自体が弟にとって意味のあることと考えられ、「兄と同じようにしたい」という意志の表れであると考えられる。これまで弟の行動は「兄のモノを手に入れる」ことが目的のようで、ただ、兄のモノを持てればいい、後からでも遊べればいい、というように解釈できた。しかし1歳頃からは、「兄のように」母にやってもらいたい、「兄のように」母と関わりたいという気持ちが出てきたものと推測できる。兄のように母との関わりを求めることは、兄が手放したモノを1人で見たり、持ったりしている以前の行動とは大きな違いと言える。

なお、兄が離れてすぐに近づくことが多かったので、兄が離れるのを待っていると考えられる。弟は、「自分は兄の後」と思っているか、母に近づきたくなったが、自分だけに抱っこをして欲しくて、兄が去った後に母に接近したと推測される。またこの時期には、弟は「モノ」によって人を注目させられるということ、モノを示したり指さしたりすれば、何をしたいか分かってくれる人がいるということを理解していると考えられる。

さらに、EP-11のように、兄と母のそばで遊んだり、近くまで行って離れて、しばらくするとまた近づいたりを繰り返す行動が見られた。これを「うろうろする」と呼ぶことにする。うろうろした結果、兄と母に介入するエピソードも見られた。うろうろするのは、兄と母の様子をうかがったり、働きかけてくれたり、注目してくれたりすることを待っているためではないかと思われる。小嶋(1982)では、きょうだい条件において、玩具を持って近づき、それを母やきょうだいのそばにおいて帰る、遊びを通して働きかけるなどの、間接的な働きかけが多く見られていた。これを小嶋は、

「母ときょうだいの間に結ばれている関係にストレートに入り込んでいけずに、やや遠慮した形で働きかけたもの」と考察している。そしてこのことは、「母ときょうだいの間になんらかの閉じた環が形成されると認知された場合に、外側からの直接には割り込みにくいという社会的認知とそれに応じた反応様式がこの年齢の子どもに出現していることを示すもの」と言っている。

「うろうろ」している弟は、兄と母が楽しそうに絵本を読んでいる場を小嶋(1982)の言う「閉じた環」と認知し、その2人の中に「ストレートに入りこんでいけず」にいると考えられる。しかし、弟は入り込みづらいつ感じているが、「入りたい」「一緒に遊びたい」という気持ちもあるため、うろうろしている最中の「見る」「接近する」などによって、「今は入って行けるだろうか」「どうやって入ろうか」などと、兄と母がやっていることに応じて、介入するタイミングやその方法をうかがっていると思われる。その結果として、弟は1歳過ぎから、兄と母に対して上手に介入できるようになっている。上手に介入するとは、兄と母の中にスムーズに入ることができているということである。以前は、兄と母が持っているモノを奪ってしまい、兄と母の遊びを中断させてしまっていたが、兄と同じように指さしをする、モノを提示して接近するなどの方法により、兄と母の遊びに大きな変化を与えずに介入していけるようになったのである。

8ヶ月頃には、モノを手に入れることを目的として、モノに向かって手を伸ばし、兄と母が絵本を見ているという状況を崩すということがあったが、1歳頃には、モノを手に入れるのではなく、兄のようにすること、母に注目してもらうこと、そして兄と母に介入するこ

表4 弟が1歳頃のエピソード

EP-8	兄が「カンカンカンカン」と踏み切りの音まねをしながら絵本を見ている。弟は、観察者の膝に座っていたが、兄に近づき、兄が見ている絵本を覗き込む。しばらくすると、兄のそばを離れる。(13ヶ月)
EP-9	兄がレールをつなげて、電車を走らせている。兄が遊び始めてしばらくは、弟は母と遊んでいたが、兄が遊んでいるのを見ると、兄の隣に座る。兄が遊んでいる玩具の一部をつかむ。兄は弟が来た場所に身体を移動して、弟が自由に玩具を取れないようにする。すると、弟は電車を1個持って、ハイハイで場所を移動して遊び始める。(14ヶ月)
EP-10	兄がプラレールの一部を母に直してもらい、それを元々あった場所に置いて遊び始める。弟は兄の行動を見ていた。弟は、玩具の中から、さっき兄が母に見せた玩具を探し出し、その玩具を持って母のそばに行き見せる。見せ終わると、元の場所に玩具を戻す。(13ヶ月)
EP-11	兄と母が絵本を読み始める。弟は刀の形をした玩具をくわえて、兄と母のほうへ近づくが、通り過ぎ、和室に行き、また戻ってきて兄と母に近づく。しかし、兄と母の前まで行って、少し見ると、また和室に行き、戻ってくる。そして、兄と母に再び近づいて、絵本を見る。その後、そばにあった دونالدの人形をくわえて、兄と母を見る。(13ヶ月)

とを目的として、弟は手を伸ばしていると考えられる。

さらに、弟が介入する際、兄に直接働きかける行動は見られなかった。「兄を母から離れさせる」というようなことはしておらず、接近したり、介入したりする際には、兄と母が持っているモノに手を伸ばす行動や母に抱きついたり、母にモノを提示する行動などをしてきた。これは、兄と母の「閉じた環」を認識した後も、兄と母をそれぞれ独立したものとして認識し、その「閉じた環」に入り込んでいくためには、愛着の対象である母に接近するほうが、弟にとっても行動しやすいのだと考えられる。

以上のように、1歳頃ともなると、弟は兄からさまざまなものを学んでいると言える。

1点目は、モノでの遊び方である。兄が遊ぶのを見たりすることで、モノの遊び方を知り、「兄が持っていたモノだから楽しい」のではなく、「この玩具は、こうやってやると音が出て、こうやってやるとこんな遊びができる」とモノの魅力を知る。これにより、自分1人で楽しむこともできるようになる。

2点目は、人との関わり方や注目の集め方を学ぶことである。兄がよくやっている指さしやモノの提示を、意志表示や注目を集める手段、介入の手段としたり、母への関わり方を真似たりする。モノの性質や面白さを理解した弟は、それを母や観察者に示すことで、自分のやりたい遊びを理解してもらい、遊んでもらって、欲求を満たしてもらっている。兄と母が遊んでも、モノを提示して接近するという弟からの積極的な働きかけが見られるようになった。

そして、3点目は二者関係への仲間入りについてである。兄と母が2人で遊んでいて「入り込みづらい」と思う時にも、そこにいかに仲間入りするかを、弟は日々の生活の中で必然的に考えさせられていると言える。その中で、モノを持って行ってみたり、うろろろして介入の仕方やタイミングをうかがっていると考えられる。また、いざ介入する時にも、言葉を話せないためいきなり入りこんでいくことが多いが、兄や母が遊んでいる場に上手く介入できるようにもなる。モノの魅力を理解することで、仲間入りはスムーズに行われるようになると推測できる。

このように、1歳頃には「自分もそれが欲しい」「兄のようにやりたい」という意志が強くなると考えられる。体格・力の面で兄に劣ることも多々あるが、手指先の発達、移動能力の獲得を伴うことにより、兄の遊んでいないモノで遊ぶ、場所を移動するなど、兄とのいざこざをなくすため、日常で学習したこと、認識したことを最大限に生かして、兄と関わりを持つことが

可能になる。そして、兄に上手く介入していくことで、自分自身の「やってみよう」という気持ちを満たしていくようになると考えられる。弟は兄をモデルとしながら関心を広げ、行動のレパトリーや遊びの方法を拡大していくことができるというように、兄は弟の能力を生活の中で高めさせる存在となっている。その上で、兄は非常に気になる存在である。弟は兄を憧れの対象とし、兄と同じようにできることを望んでいると考えられる。

3. 4 1歳半：兄に遠慮はしない。兄は遊び仲間、ライバルだけど頼りになる人。できることなら、兄と同じでありたい

1歳半頃になると、弟には特にお気に入りの本ができてきた。表5のEP-12・13では、兄が遊んでいる様子を遠くから見ているだけだが、EP-14では、乗り物の本を見ている兄に対して、その本を奪うように向かって行った。これは、自分のお気に入りの本であるその本を兄が見ていたことをきっかけに起こったと考えられる。また、EP-15のように、自分がやっていることに兄が入り込んできた場合、それを押しのけたり、邪魔だという意志を示したり、EP-16にあるように、奪い合いをすることもある。以前ならば、泣いたりしていたが、兄にかまわずにページをめくったり、兄の手をどかしている。これらは、兄に対して遠慮することなく、自分の気持ちを優先させることを獲得したためと考えられる。そして、このような中で弟は、いつでも自分の思い通りにはいかないこと、モノをめぐる兄とけんかすることを覚える。一方でこの時期でも、兄が遊んでいるモノを後から取りに行くという行動は生じている。このことから、状況によって、弟は兄に仕掛けたり、遠慮したりすることがあると推測できる。

さらにEP-17は、弟が兄の能力を理解し、それまで母や祖母などにやってもらっていたことを兄にやってもらうというものである。兄の手に触り、指さすことで、兄に働きかけている。そして兄もその弟の呼びかけに的確に応じている。

以上のように、1歳半頃からは、弟は兄をただ上の存在としたり、遠慮したりするのではなく、兄の能力を理解し、かつ、自分の意志を優先させることも覚えつつ、兄を頼ったり遊び仲間やライバルと見なしているのではないかと考えられる。菊地(2006)の言うように、「自分が家庭内で最も幼いことを有効利用し、自己主張、自己表現の手段を身につけ、兄や姉との共存のために要領よい生活態度を覚えて」いつていると考えられる。

表5 弟が1歳半頃のエピソード

EP-12	弟は隣の部屋へ行く。兄はテレビを見ながら、シンケンジャーのファイルを手にする。しばらくすると、弟は部屋と部屋の境に立って兄のほうを見る。しばらくするとまた隣の部屋へ行く。(19ヶ月)
EP-13	弟は隣の部屋にいる。兄は祖母といろいろな玩具を出して遊ぶ。しばらくすると、弟が紙飛行機を持って戻って来て、祖母のもとに駆け寄る。弟はそばにいる兄の玩具を見るが、すぐに自分の飛行機でまた遊び始める。飛行機を観察者に見せに来る。すると、そばにあった玩具を持って祖母のもとへ、次に観察者のもとへ行く。再び弟が祖母のもとへ行き膝に座る。弟は祖母が持った本を持って立ち上がり、隣の部屋へ行く。(19ヶ月)
EP-14	兄は乗り物の本を持って祖母のそばで寝転がって一人で見始める。弟は隣の部屋にいる。しばらくすると、弟が戻ってきて、兄の方へ向かって行き、本に触る。兄が「ダメ」といって、遠ざけるが、弟は兄に近づきながら「ん、ん」と高い声を出す。祖母が兄に「貸してって言ってるよ」と言うが、兄は「ヤダーヤダー」と言う。弟は兄を少し見て、本に手を出してつかむが、すぐに兄は本を遠ざける。弟は「ヤーヤー」と言いながら、本のほうへ移動するが、兄は「ダメ」と言いながら方向を変える。弟はしゃがみこみ、泣き声を出しながら本を触ろうとする。兄はやはり遠ざけ、弟は泣き始める。その弟を兄は足を伸ばして蹴る。弟は兄に触り、泣きながら本を取ろうと頑張る。兄は「ダメ」と言う。祖母は弟にトミカの本を差し出したが、兄がそのトミカの本を取る。祖母は弟に、最初に奪い合っていた乗り物の本を差し出す。弟は本を見始める。兄はトミカの本を見る。(19ヶ月)
EP-15	弟が本を見ている。本の絵を指さしながら、観察者を見上げたりして、名前を言ってもらう。すると、兄が近づいてくる。兄が手を伸ばして、指差しをする。しばらくは、兄の手を見たりしているが、少しすると、兄の手をどかし(払うようにする)ページをめくる。兄は手をどかす。その後も、兄はそばにいるが、弟は自分が見たいようにしている。(19ヶ月)
EP-16	兄がクレヨンでお絵かきを始める。弟は近づき、自分でもクレヨンをつかむ。兄は弟に画用紙を取られたくないようで、「ダメ、ダメ」と言う。しかし、弟は寝転がり、画用紙を覆うようにする。兄が画用紙を引っ張ると、弟は「キャー」と奇声を発し、抵抗する。その後、しばらくすると落ち着き、2人で無造作に画用紙の上書き始める。クレヨンの色の取り合いをする。1本だけでなく、何本も持つ。持ちきれなくて落とすと、一方がそれを取りにいく、の繰り返し。やがて、兄が他の玩具で遊び始める。(19ヶ月)
EP-17	本を見ながら、弟が兄の手に触る。兄は「これは、～」などと、絵を見ながら名前を言う。(19ヶ月)

4. 総合考察

4. 1 乳児はきょうだいをどのようにとらえていくのか

本研究より、弟は兄を次のようにとらえていったと考えられる。8ヶ月頃では、兄は母とは違って、自分の望みをかなえてくれない人、と弟はとらえている。10ヶ月頃になると、兄は面白い人と思いつつも、自分よりも上の存在として警戒心を持つようになる。そして、1歳頃からは、弟にとって、兄は非常に気になる存在であり、憧れであり、兄と同じであることを望むようになる。さらに、1歳半頃になると、上の存在である兄を理解しつつも、自分の気持ちを出すようになり、兄への遠慮が少なくなり、兄を遊び仲間、時には、ライバル、時には頼りになる人として見なすようになる。

このように弟は、日々の生活での兄との関わりによって、兄はどのような存在であるのかを学習し、兄と

うまく付き合っていくために、兄に対する行動を選択・調節することができるようになったと考えられる。また、弟の発達、兄と弟の関わりが増加により、兄に対しても、自分の甘えの気持ちを出すようになったと考えられる。

以上のように、弟の心身の発達に伴って、兄についての認識も著しく変化していったが、同時に兄も発達していく。したがって、弟側の発達だけでなく、兄の発達に伴う兄の弟に対する行動の変化によっても、弟の兄に対するとらえ方は変化すると言える。このことから、きょうだいの年齢差や発達の様子によって、きょうだいのとらえ方に違いが起こることが容易に考えられる。

4. 2 社会性の発達

乳児はきょうだいとの関わりを通して、人との関わり方を学んでいく。きょうだいと関わることによって、きょうだいの様子、きょうだいに対してどのように自

分が関わればよいのか、どのように関わればうまくいくかということを読んでいく。

8ヶ月頃には、兄と母の違いを区別し始めたことから、子どもと大人は違うということを感じ始めていると考えられる。10ヶ月頃には、兄と母を区別して、それぞれに対する行動を変えていることがわかった。これは、相手とうまく付き合うためにどうしたらよいかということを考え、相手によって行動を調節する必要があることを学んだためと考えられる。そして1歳頃には、兄に対して遠慮するかのような行動をとりつつも、その中で上手に遊ぶこと、兄の母に対する行動を見たり、真似たりすることで、大人にどのように甘えたらよいか、どのようにしたら注目してもらえるのかということを読んでいる。さらに、兄と母の二者関係への仲間入りのタイミングや方法などを必然的に考えさせられている。ここで、いかに人から注目を集めるか、二者の関係を読み取り、それに対してどう自分がアプローチしていけばよいのかということを考え、受け入れてもらえるように行動する必要があることを学んでいる。さらに、1歳半頃には、自分の意志を優先させても必ずしもかなわなかったり、相手とけんかをしたという、子ども同士では、自分の意志があっても常に自分のものになるとは限らないということを読んでいる。

これらは、乳児期からのきょうだいとの関わりを通して獲得されてきたものであると考えられる。自分より、何においても力が上である兄が脅威であるからこそ、その中で自分が楽しむための術を身につけられるのではないだろうか。

4. 3 タテ・ヨコ・ナナメの関係

タテの関係とは、「保護する者-保護される者、しつけをする者-しつけられる者など、同じ次元に立っていない関係」をいう。8ヶ月頃は、兄は自分の望みをかなえてくれない存在として、10ヶ月頃には、自分よりも上の存在であるとして弟は兄をとらえていると推測された。そして1歳半では、「兄の能力を知り、兄に助けてもらう」という行動が見られるようになった。

このことから、10ヶ月頃までは、上に当たる兄には、弟を保護する、教えるという行動は見られない。兄はひたすら弟を脅かすような行動をしており、兄が弟よりも上の状態という一方的なタテの関係であり、大人と子どもとの間のタテの関係とは質が異なると考えられる。しかし、1歳半頃からは、「教え-教えられる」というタテの関係も見られた。これより、日々の

関わりによって兄が自分よりも上の存在であることだけでなく、兄がどの程度物事を知っているかを弟が認識するなど、兄も弟も互いの能力を理解することで、タテの関係が出来上がったと考えられる。

ヨコの関係とは、「養育やしつけはなく、同じ次元に立っている関係」をいう。10ヶ月頃には、兄は上の存在であると同時に、弟にとって興味をひく存在となり、1歳頃には、憧れの対象ともなっている。これは、ヨコの関係の要素であるといえる。10ヶ月頃になり、弟の移動能力が高まり、きょうだいで同じモノ・同じ場所で遊んだりするようになったからこそ、ヨコの関係が生まれたと考えられる。そして1歳半頃には、弟は同じ玩具で遊んだり、行動を真似たりするだけではなく、兄からモノを奪ったり、兄をライバルととらえたり、仲間ととらえるようになったりと、以前よりもより「子ども同士」という意味合いが強くなったと考えられる。

そして、ナナメの関係は、タテの関係とヨコの関係の両方が成立したときに始まる。8ヶ月頃にはタテの関係があり、きょうだい関係の形成当初はタテの関係のみであると考えられる。そして10ヶ月頃には、一緒に遊ぶなどヨコの関係も成立している一方で、弟は兄に対して警戒するなどタテの関係の要素もある。このことから、ナナメの関係は10ヶ月ころに生まれると考えられる。

タテの関係の要素というのは、能力差が明らかになるときに顕著になる。乳児である弟は、明らかに兄より何においても劣るため、きょうだいではタテの関係のほうが持ちやすい。ヨコの関係の始まりは、弟が兄と一緒にやりたいという気持ちを持ち、弟と一緒に遊ぶことを受容し、遊び仲間だと感じ始める時なのではないかと思われる。弟と兄が互いに互いの存在を理解し、きょうだいがいることを楽しめるようになった時に、ヨコの関係は生まれていくと思われる。このことから、きょうだいが相互にヨコの関係であると思えるようになるのは、下の子の発達を待つ必要があると推測できる。タテの関係は目に見えているが、ヨコの関係というものは、きょうだい間の相互の絆や感情によるものが大きいと考えられる。

しかし、タテの関係、ヨコの関係にも、発達に伴う質の変化が見られ、きょうだいの成長によって、ナナメの関係の質も変わってくると推測できる。きょうだいは、タテの関係、ヨコの関係の質を変化させていくことにより、そのきょうだい独自のナナメの関係を次第に作り上げていくと考えられる。

引用文献

- Bowlby, J. (1969). Attachment and loss. Vol.1. Attachment. New York:Basic Books. 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子・黒田聖一(訳) (1997). 母子関係の理論: I 愛着行動 岩崎学術出版社.
- 江口純代 (1978). 乳児幼児期初期における同輩関係の発達 北海道教育大学紀要 (第1部C), 29 (1), 221-233.
- 早川孝子・依田明 (1983). ふたりきょうだいにおけるきょうだい関係 横浜国立大学教育紀要, 23, 81-91.
- 伊藤則博・五十嵐智子 (1977). 幼児期のきょうだい関係—2人きょうだいの場合 日本教育心理学会第19回大会論文集, 158-159.
- 岩田美保 (2000). 幼児は赤ちゃんをどのようにとらえているのか 日本女子大学大学院紀要家政学研究科・人間生活学研究科, 6, 77-83.
- 菊地篤子 (2006). ふたりきょうだい育児をする母親がとらえる「下の子らしさ」 小田原女子短期大学紀要, 36, 55-62.
- 小嶋秀夫・山田洋子・村上京子・河合優年 (1982). 乳幼児の「きょうだい—母関係」に対する認知と行動 (1) (2) (3) 日本教育心理学会第24回総会発表論文集, 288-293.
- 小嶋秀夫 (1989). 乳幼児の社会的世界と発達 小嶋秀夫 (編) 乳幼児の社会的世界 有斐閣 pp.1-19.
- 高橋道子・佐藤桂子 (1985). 乳児の社会的相互交渉における物の役割 東京学芸大学紀要第1部門 教育科学, 36, 19-29.
- 依田明 (1965). きょうだいの性構成ときょうだい関係 日本教育心理学会第7回大会論文集, 262-263.
- 依田明 (1968). 仲間関係ときょうだい関係 教育と医学, 16 (9), 52-57.
- 依田明 (1996). 少子化時代の「きょうだい関係」(特集 少子化時代の子どもたち) 教育と情報, 458, 6-12.

付記

本論文は、第1執筆者の指導の下に、第2執筆者が東京学芸大学卒業論文(平成21年度)として提出したものに加筆・修正したものである。対象児となったきょうだい、長期にわたって観察に協力くださったお母様に心より感謝申し上げます。